
戦場の子供

竜丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場の子供

【Nコード】

N8908B

【作者名】

竜丸

【あらすじ】

戦場に佇む子供。その子供が気になって、男が車を止めた事で、悲劇が訪れた。

（前書き）

この短編はグロテスクな表現などが含まれています。

それ程強烈ではないですが、死を見たくない人は避けてください。

感想で最後の意味が分かりづらいと指摘をいただいたので、少し付け足しました。

男は昨日大規模な戦闘で勝利し、占領した町を仲間と共に車に乗って巡回していた。町の至る所には死体が転がり、雨風凌げたはずの家はその機能を失って、生き物の気配の無くなったこの町は、死の静かに迎えようとしていた。時間はそう、星が溢れ流れ出しそうな夜。

暫く車で巡回を続けていた時、後ろの席で窓の外を見ている男が、明かりもなく真つ暗な中で子供が1人泣いているのに気づいた。その男が「止めてくれ」と言っ、車から降り子供に近寄って話しかけた。

「どうしたんだい？　こんな夜に1人で泣いてるなんて。君に釣られて、お星様も泣き出してしまうよ。ほら、今お星様が流れてしまった。このまま君が泣き続けていれば、今夜中には全てのお星様が無くなってしまふ。ね。だから泣き止んで、理由を聞かせてくれなかな？　君がこんなところで泣いている理由を」

子供は、ボロボロで所々に穴が開き、首の部分は片方の肩が出る位まで伸びきった服を着ており、足には靴を履いておらず切り傷や擦り傷だらけ、手には古ぼけて目や耳が取れ、すでに元が何の動物だったか分からなくなった人形を大事そうに持っていた。一目で分かるのは、この子供は大人達の醜い争いに巻き込まれ、未来が見えなくなってしまう事。最初男が近寄った時にはただただ泣いていた子供が、男の優しい声と喋り方に少し落ち着いたらしく、泣き止んで逆に男に質問をした。

「おじさん、おじさんはどこの国のへいたいさん？」

「おじさんかい？　おじさんはこの国を救いに来たんだ。この国を苦しめていた悪い大人を退治するために、違う国から来たんだよ」

「そうなんだ」と呟いて、子供が続けた言葉は男を戸惑わせた。

「じゃあおじさんが、ぼくのおとうさんを殺したんだ」

「え……。ど、どうしておじさんが、君のお父さんを殺さないといけないんだい？」

男は自分の戸惑いを悟られないよう、出来るだけ冷静な声でそう言ったが、子供は男の戸惑いとは関係なく淡々と続ける。

「あるよ。だってぼくのおとうさんは、この国のへいたいさんをしていたんだ。けど、きのう殺されたの」

「そ、そうだったのか……。それは済まない事をした。じゃあ君は帰る家が無くなってしまったんだね。だったら車に乗りなさい。おじさんが責任を持って、君を暖かい食べ物がある場所に連れて行ってあげるから」

兵隊が言った言葉に、喋るのではなく子供は首を横に振る。その様子を、子供に話し掛けている男とは明らかに違う眼差しで見つめ、車の中で仲間達は目配せをし合っている。そんな様子にまったく気づかない男は、自分の心の中にある罪悪感で、ただ子供が嫌がった理由を聞くこととしていた。それは周りが見えていなかった事を意味した。

「どうして嫌なんだい？」

「だって、だって……。もし敵につかまるくらいなら自殺しろって、おとうさんにいわれてるから」

そう喋り終わったと同時に、手に持っていた人形を離して、子供はボロボロの服の中に手を入れた。そこで男は気づいて、車に向かって走り出す。その服の中にある物を取り出す時に見えたシルエツト、この戦場では誰もが持っている物の形。その形を目にした、いや、正確に言うなら子供が服の中に手を入れた瞬間。車に乗っていた仲間が、一斉に銃の引き金を子供に向かって引いた。そこには何の躊躇いもなく、男が車に向かって叫んでいる言葉を聞かず、車に向かって走ってくる男を避けて、子供に何発も何発も弾を撃ち込んだ。男は無意識のうちに体が反応して、地面に伏せて銃撃が止む

のを待つていた。子供は一発受けることに、壊れた人形のように踊り、銃撃が止むまでその踊りは続き、止むと同時に釣られていた糸が切れ、地面に崩れ落ちた。銃声が鳴り止むと同時に、男は子供に駆け寄った。立ち上がるのも惜しんで這って駆け寄るが、既に手遅れなのは見る前から分かつていた事だった。そんな子供を抱きしめて、男は肩を震わして泣いた。ただただ謝りながら泣いている男を見て、仲間の一人が見ていられなくなったのか男に近づき、男の肩を掴んで大きな声を出した。

「この子供は銃を持っていたんだ！ こうしなければ」

しかし、男は子供の服の中に手を入れて、血に染まったそれを取り出した。それを見て、近づいた男は声を失くし、泣いている男は震える声で怒鳴った。

「こんなもので！ こんなもので人が殺せるのか！！」

男の手には、子供が服から出そうとしていた、今はその子供の血で染まった銃の形をした木の棒が握られていた。

「だから止めただろ！ 撃つなって！！ なのに、なのになぜ撃つたんだ！！ なあ！ 何で」

「もしもそれが！ もしもそれが本物の銃だったら、お前がその子供のようになってたかもしれないんだ。ただ今回は、本物ではなく偽物だっただけだ。お前は優しすぎるんだよ。戦場では、子供も敵になる時があるんだ。それに明日でお前は本国に帰れるんだろ？

家族も待つてるんだろ？ な、仕方なかったんだよ。そう思うしかないんだ」

男は奥歯を割れるほど噛み締めて、仲間が見ているのも関係なく涙を流して泣いた。それでも、どうしたって気持ちは収まるものではなかった。だが、どうする事も出来ないのは分かっていた。物言わぬようになって、生気を失くした瞳で星空を見上げる子供。そのままにはしておけないと、男は子供にまた謝って、二度と開かなくなった瞼を指一本で閉じていく。両方の瞼を閉じた所で、また謝った男は、子供をその場に寝かせて車に向かった。手には、血で染ま

った人形と、単なる枝で出来た木を持って。

車の窓に凭もたれて、ただ昇る日を見つめていた。その時思い出したように、ポケットに入れていた家族の写真を取り出して、また涙が溢れた。そこに映っているのは愛すべき妻の姿と、何もしていないのに、ただこの国で生きていただけだったのに、先程殺された子供と同じ背格好の2人の娘。もし時代が違えば、国さえ同じならば、出会っていたかもしれないと思うと、男はどうしても悔やみきれず、子供の血で染まった人形を抱きしめて、涸れるまで涙が止まる事なく流れ続けた。

「おいどうだ、持っているか？」

「はい。確認できました」

岩場に潜む男が2人。1人は手に何か、そう狂気を孕んだスイツチらしき物を持っている。もう1人の男は、三脚の上に置いている望遠鏡で1台の車を見ていた。その先に見えるのは、男が泣いている姿と、血の付いた何かを抱きしめている様子。

「少年よ……。君の死は無駄ではない！ 憎き民に聖なる鉄槌を下す事がこれで出来るのだ！ そして君は、この鉄槌が下った暁には、偉大なる神の元で幸せに暮らす事が出来るだろう」

2人は声を揃えて大きな声で叫んだ。「我々の神は偉大だ！！！」と。

その日、1つの部隊が全員死体で見つかった。死因は爆死。何故か爆発は車の中で起こったという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8908b/>

戦場の子供

2010年10月13日15時18分発行